

# なら小地域福祉活動サミット2012 から見る、 つながりづくりの今

少子高齢化が進み、無縁社会と言われる昨今、全国的な広がりを見せている小地域福祉活動はわたしたちの暮らしの大きな安心感につながっています。

そんな暮らしに密着した活動をしている方々が、工夫を学び合うことを目的に、「なら小地域福祉活動サミット2012 ~人がつながり、まちを元気に~」を開催しました。

当日は、基調講演や分科会の他に、県内各地の小地域福祉活動の取り組みを紹介する情報コーナーを設置し、活動に活かせる知恵の数々を共有しました。

※小地域福祉活動とは

顔の見える身近な地域(自治会や小学校区域)で、暮らしの困りごとを解決することを目指して住民が主体となって行う福祉活動。



なら小地域福祉活動サミット2012  
平成24年9月8日(土)  
奈良県社会福祉総合センター 参加: 383名



基調講演

## 『人がつながり、まちを元気に ~地域力の可能性を“やねだん”に学ぶ~』

豊重 哲郎 氏 (鹿児島県鹿屋市串良町柳谷公民館 館長)

鹿児島県大隈半島にある過疎高齢化が進む柳谷集落、通称「やねだん」。公民館長に就任した豊重氏は地域再生を「行政に頼らない感動のまちづくり」という信念の下、住民の心を一つに、独自の商品開発で自主財源を増やし、福祉や教育を自ら充実させ、住民の力で地域再生を実現しました。小さなまちの地道な活動が、どのようにして実を結んだのか、その実践に学びました。

### ● むらおこしで福祉を

やねだんの活動には、その信念のとおり「感動」が人を動かし、「感謝」の気持ちが地域に広まる仕掛けがあります。例えば、敬老の日や勤労感謝の日には、地域の子どもからの手紙が村内放送で読み上げられます。それを聞いた住民からは感動の声が、手紙を送られた高齢者からは感謝の声が寄せられます。このような活動の中で、住民の間に“お互い様”的な気持ちが芽生え、地域みんなの取り組みに変わると言います。

また、土着菌を活用した家畜ふん尿の環境対策や農産物・焼酎の生産など、活気ある生産活動のほか、空屋を利用した迎賓館の竣工や地域学習の拠点としての活用な



「感動と感謝で地域は変わる」と豊重氏

どにも取り組んでいます。

これら地域の資源を活かしたむらおこしの活動には、様々な場面で、子どもから高齢者まで多様な世代の出番と役割があります。豊重氏は講演の中で、「誰かがやるじゃダメだ。みんなでやらないと!だって、自分たちが住んでいる大切なまちでしょ?」と何度も強調していました。決して1人のリーダーシップではなく、地域住民一人ひとりの「参加」と「納得」を得ながら、活動を通じて「人がつながる」工夫を重ねることで、地域ぐるみのまちづくりに取り組んでいく姿には、誰もが暮らしやすい福祉のまちづくりを進める上で大きなヒントが詰まっていました。

分科会  
①

## 『サロン活動の魅力再発見』～つながり、気にかけあう仲間づくりの可能性～】

実践報告

高見 芙美 氏(香芝市 白鳳ふれあいの会)  
 奥本 まち代 氏(山添村 毛原ほのぼのサロン)  
 泉沢 みち代 氏(大淀町 新岡憩の会)

コーディネーター

竹村 安子 氏(大阪市立大学 非常勤講師)

## ● サロンのこれから

高齢化するニュータウンで、歳をとっても助け合えるご近所づきあいをめざし喫茶サロンに取り組む白鳳台。顔見知りであっても話す機会が少なくなった山間地域で、気軽なお茶のみ場を設ける毛原地区。駅前の旧市街ならではの親密なご近所関係を活かしつつ、茶話会型のサロンに取り組む新岡地区。高齢化する地域で「つながりの必要性」を原点にする3つの活動から、運営面での課題も多くサロンの可能性について考えました。

共通するのは、「大切な場として地域に根付いている」こと。要援護者を把握する自治会から、サロン招待の誕生日券を発行するなど、地域の団体との連携があげられました。個人情報問題の突破口、拠点や財源の確保にもつながる大切なポイントです。また、「無理をしないで運営すること」。お世話「する人・される人」の関係は、参加者の気兼ねにもつながります。プログラムや、ご馳走が本当に望まれているのかを見直し、手間をかけずゆっくりと

話のできる場にすることで、後継者不足の解消や、身近な地域でのサロンの増加、互いに見守り・気にかけあう関係づくりにつながるのではないかと確認しました。



(左から)竹村氏、高見氏、奥本氏、泉沢氏

分科会  
②

## 『住民が織りなす「見守り・支え合い」』

～「気づき」を「関わり」に変えるプロセスについて考える～】

実践報告

松尾 一未 氏(三郷町 小地域ネットワーク連絡会)  
 中森 三起子 氏(下市町 善城区女性部ご近所ふれあいネットワーク)

コーディネーター

山下 憲昭 氏(大谷大学 教授)

## ● 気になる・関わる・支え合う

住民同士のつながりの少ないニュータウンで、ひとり暮らし高齢者の増加や孤独死の問題を背景に、早期発見・早期対応の仕組みを組織化した三郷町、また古くからの顔見知りが暮らす集落で、見守りを個人的なつながりに

頼らずあえて組織化した下市町善城地区。二つの地域性の異なる実践事例をもとに、「気になる」人を実際に「気にかける」活動として地域に拡げ根付かせていくプロセスについて考えました。

地域での見守り活動に立ちはだかる「個人情報」の壁や、発見した課題をどうつないでいくかの問題についても協議を深めました。困った時に“助けて”と言える地域になるためには、「暮らしの中にお互いに立ち入れる関係」を地域の共通認識としてどう築いていくかが鍵となります。暮らしの課題を共有するための「話し合う」場の大しさ、地域に理解の輪を広げていくための情報発信の工夫、自治会を始めとする地域の各種団体や社協・専門職など様々な関係者とつながりながら活動を進めていくことの必要性などが改めて確認されました。



(左から)山下氏、松尾氏、中森氏

## 『活動リーダーさん集まれ! ~地域ぐるみで活動を活性化させる工夫を考えよう~』

## 実践報告

伊藤 實 氏(奈良市 平城西地区社会福祉協議会)  
中田 良子 氏(五條市 大塔福祉ふれあいの会)

## コーディネーター

前坂 良彦(奈良県社会福祉協議会 主幹)

## ● リーダーとしての視点

地区での活動計画づくりが転機となり、地域のあらゆる関係機関・団体との連携を図り、自分たちの問題として地域課題に取り組んできた平城西地区。山間地での家族介護への不安から始まり、同じ悩みを持つ婦人会の仲間と一致団結して活動を始め、行政の理解を得ながら、自分たちの地域の福祉課題に取り組んできた大塔地区。性格の違う2つの地域ですが、共通項として、丁寧に地域を回り、住民をはじめ自治会・民生委員等の関係団体に納得してもらう手間を惜しまず、活動への理解を得ながら取り組んできた、リーダーとしての覚悟がありました。

担い手の確保や財源の問題は尽きませんが、活動を維持・発展させることのみに力を注ぐのではなく、今の地域課題に合った取り組みを実践し、地域の関係機関との連携を図りながら進めていく地道な取り組みのなかで、

様々な課題が解決へと向かいます。

活動を一步引いた目線で捉え、「今、地域に必要なもの」や「活動の目的は何か」をもう一度見つめ直すことが、リーダーには大切な視点であると再確認されました。



リーダーに必要な視点について、  
様々な意見が交わされました



(左から)伊藤氏、中田氏

## 全体会

## 広がれ、小地域福祉活動 ~人がつながり、まちを元気に~

サミットのフィナーレとして、各分科会の発表者代表から、日頃から大切にしている視点や思いを語っていただきました。

発表された実践は、決して特別な例ではなく、地域の実情に合わせて試行錯誤しながら地道に積み重ねてきたものであることをふまえた上で、いくつかの活動の秘訣が見えてきました。



活動者と社協が、同じテーブルの上で  
暮らしの課題を共有できる、  
素晴らしい交流の場でした!  
(山下憲昭氏)

地域の課題がダイレクトに見える  
小地域福祉活動には、  
自分たちで地域の暮らしを  
変えていく楽しさがあります♪  
(竹村安子氏)



「担い手が頑張りすぎず、楽しさや感動を共有すること」が、仲間を増やし継続性につながっていることや、「生活のなかで実感した暮らしの課題を共有すること」が、プログラムに追われずに目的を意識した取り組みを可能にしていること、などです。

## &lt;参加者の声(アンケートより抜粋)&gt;

- 同じ事で悩んでいる活動者の方々と課題を共有できた。(60代・民生委員)
- 行事に追われながら活動している自分たちに気づいた。(60代・小地域活動者)
- サロンの真の目的を見つけることができた。(60代・小地域活動者)
- 人と人がつながる仕組みを考えていきたい。(40代・行政職員)

また、リーダーの方々は、人と人がつながり、心で感じるような体験を共有する場面を、根気強く仕掛けていること。これにより説得ではなく「納得」が生まれ、一人ひとりが主体的に考え動く地域づくりにつながっているようです。

さらに、地域の様々な活動者や団体(民生委員、自治会、老人会等)としっかり力を合わせることの大切さや、地域へ足を運び、暮らしの実態をつかみながら、住民が主役の活動に一緒に寄り添って働く専門職の存在が欠かせないこと、社協が、その期待に応えていくことの重要性も確認されました。

定員を大きく超える参加をいただき、活動者の熱意や関係者の関心の高さを実感するとともに、この活動の可能性を再確認する機会となりました。

県社協としても、「暮らしのセーフティネットとしてのつながりと仕組みづくり」をめざし、市町村社協とともに、小地域福祉活動をさらに県内全域に広げていきたいと思います。

